

コミュニケーションのためのロシア語教育文法についての覚書

堤 正典

キーワード：ロシア語教育文法，コミュニケーション能力重視，体系主義，形式主義

1. はじめに

ロシア語検定試験 ТРКИ を引き合いに出すまでもなく，ロシア語教育においてもコミュニケーション能力が重視されなければならない。もちろんこれまでにもさまざまな工夫があったわけだが，まだなお教材や指導法などを改良していく必要があるだろう。その中で，ロシア語教育のための文法も考え直していく必要もある。教育文法をよりコミュニケーション能力重視のためのものに改訂していくのである。

他の言語の教育を見ると，例えば，日本語教育ではコミュニケーションのための教育文法が提言されている（野田 2005，野田 2013，小林 2013）。そこで，本論では，野田（2005a）における日本語教育文法への提言を土台にコミュニケーションのためのロシア語教育文法の可能性・方向性について若干の考察を行なう¹。

もちろん，日本語教育とロシア語教育とでは，状況に様々な違いが存在し，当然，条件が異なっているわけだが，それでもいくつかの知見は得られるだろう。考察の第一歩としたい。なお，この日本語教育文法への提言については，学習者がどの母語話者であるかを特定していないが，ここでのロシア語教育文法の学習者は日本語母語者を想定している²。

2. コミュニケーションのための教育文法

野田（2005a: 1-2）は，コミュニケーションのための日本語教育文法が必要となってきた背景として以下の2点を満足する教育文法が必要になっているとしている。

(1) 学習者の多様化に対応する日本語教育文法

これまでは聞く，話す，読む，書くという4技能を上級まで学習する「エリート日本語学習者」を対象にしてきた。これからは学習者の多様化に対応する文法にする必要がある。

¹ 小林（2013）は，コミュニケーションを重視する「日本語教育文法」と言っても多様であり，必ずしも野田（2005）のような考えばかりではないことにふれている。

ロシア語教育文法でも，コミュニケーションや機能に特に注意を払うものがある（例えば，Величко 2009）。しかし，それも既存の文法を土台にコミュニケーションに関わる様々な機能を詳細に論じるようなもので，ここで述べることとは違いがある。

² 野田（2005a）の提言の中には，教育文法を学習者の母語に対応させたものにする 것도盛り込まれている（pp.11-13）。

(2) 日本語学に依存しない日本語教育文法

これまでは日本語学で研究された文法をもとにしてきたため、それに引きずられてきた。これからは日本語学習者が日本語でコミュニケーションするときに必要な文法にする必要がある。

また、コミュニケーションのための日本語教育文法の基本的な方針が5項目挙げられている(野田 2005a: 2)。(3)(4)(5)は(1)から導かれる方針であり、(6)と(7)は(2)から導かれる方針とされている。

(3) 無目的な文法から聞く・話す・読む・書くそれぞれでの文法へ

これまでは総合的な日本語能力を育成するという、目的のはっきりしない文法だった。これからは、書く、話す、読む、書く、それぞれの目的に応じた文法にする。

(4) 正確さ重視の文法から目的を達成できる文法へ

これまでは正確さが重視されてきた。これからはこのコミュニケーション活動が成功するかどうかを基準に、どんな文法項目を重視し、どんな文法項目を切り捨てるかを定める。

(5) 一律の文法から学習者ごとに文法へ

これまでは教室での一斉授業を前提に日本語教育文法が作られていた。これからは日本語を学習する目的や周囲の環境、母語などの違いに応じてオーダーメイドの文法が作れるようにする。

(6) 骨格部分重視の文法から伝達部分重視の文法へ

これまでの日本語教育文法は分の骨格部分を中心にしてきた。これからは相手とのコミュニケーションに直接関わる伝達部分や社会言語的な能力を重視する。

(7) 形式を基盤とする文法から機能を基盤とする文法へ

これまでは文法形式が先にあり、それを使う場面を作るという方向だった。これからはコミュニケーションの目的が先にあり、その機能を果たすための文法を作る方向にする。

3. コミュニケーションのためのロシア語教育文法

前節の提言の各項目は必ずしも日本語母語者を学習者と想定したロシア語教育文法にあてはまるわけではない。しかし、議論の出発点において参考にはできるだろう。本論では、以下で(1)(2)(3)(4)を特に取り上げ、ロシア語教育文法に当てはめて考えていく。

3.1 学習者の多様化に対応するロシア語教育文法について

(1) では日本語学習者の多様化への対応の必要性が挙げられている。すべての学習者が言語の四技能を上級まで習得するわけではなく、それぞれの学習者に対応した教育文法が必要であると述べている。

日本におけるロシア語学習者数は多いとは言えない。しかし、ロシアとは、中国や他の欧米圏と比べては少規模かもしれないが、多様なレベルでの交流や関係が存在している。ロシアに旅行に行くため、ロシアに仕事で行くため、ロシアに留学するため、あるいは逆にロシアから人が来るから、等々、ロシア語の必要性には様々な要因がありえる。それに対して、すべて同じ文法を教えることがよいのだろうか。どの学習者にも同じように文法を教えることがそれぞれの目的に対して効率がよいと言えるのだろうか³。

3.2 ロシア語学に依存しないロシア語教育文法について

(2) では、「日本語教育文法」(寺村秀夫により確立されたとする)に依存することへの批判を述べている。「日本語教育文法」では形式による体系化が行われてきたが、そこから体系主義と形式主義の悪影響を受けているとしている。「体系にまとめやすい部分が重視され、まとめにくい部分を軽視する傾向」(野田 2005a: 6)から、格助詞は重視されるが、「ね」「よ」などの終助詞は軽視されるという⁴。また、「同じ形式に2つ以上の機能がある場合、それらなるべくまとめて導入しようとする傾向」(野田 2005a: 6)があり、教える文法が形式を中心に決められているという。当該の機能のコミュニケーションでの必要性を鑑みた文法であるべきということである。

ロシア語はいわゆる屈折タイプの言語で、語形変化が豊富である。文において適切な語形を用いなければならない。ロシア語教育における基礎文法は多くの部分が語形変化(形態論)で、体系と形式は重視される。しかし、当然のことであるが、語形変化を暗唱できたとしても、ロシア語でコミュニケーションができるとは限らない⁵。ロシア語の文法が

³ 学習者が少数なので、多様性が顕在化しにくいとも考えられる。また、学習者が少数であることから多様化への対応がしにくいということもあるだろう。

実際にはすでに以前から多様化していたのではないだろうか。筆者は1980年代、90年代に、大学の他に、職場の研修やいわゆるカルチャーセンターでロシア語を教えた経験がある。職場の研修はともかくとして、後者のカルチャーセンターでは、ロシア語を学ぼうとする多様な背景があった。一律に教えるように作られた教材を用いて授業を行い、受講者はそういうものとして受け入れてくれていたが、果たしてそれでよかったのか、今でも疑問に思う。野田(2005a)では(5)で「学習者ごと文法」まで提唱されている。

⁴ アレキサンダー・コステルキン氏との個人的な意見交換において、ロシア語でもいくつかの *частица* (小詞) は(特に話し言葉の)コミュニケーションでは重要な役割をはたしているにもかかわらず、ロシア語教育で重要視されていない(というより、ほとんど無視されている)との指摘を頂いた。(6)や(7)にも関わることだと考えられる。

⁵ かつてカルチャーセンターでロシア語を教えていたとき、受講生の一人が、「文法」というと難しいものという固定観念があったのかもしれないが、「文法はあまりやらないでください(教えないでください)」と言ってきたことがある。その言葉を聞いて何と答えたかは忘れたが、当時の私は、ロシア語は文法(≒語形変化)を勉強しなくては、勉強したこと

体系的に理解できていることと、ロシア語でのコミュニケーション能力があることはイコールではない。ロシア語教育の本来の目的は後者にあり、ロシア語教育では後者のために文法教育もある。

また、従来の体系の把握の仕方が、実際の語彙の分布と合っていないこともある。形容詞長語尾形の変化語尾はいくつかの種類があり、「硬変化」と「軟変化」の他に「混合変化」と呼ばれるものがある。

(8)	m.	f.	n	pl.
硬変化	нов	-ый, -ая,	-ое,	-ые
混合変化	руск	-ий, -ая,	-ое,	-ие
	хорош	-ий, -ая,	-ее,	-ие
軟変化	син	-ий, -ая,	-ее,	-ие

(8) の表（主格形のみを挙げた）からわかるように、確かに「混合変化」の語尾は、「硬変化」の語尾と「軟変化」の語尾が混ざっている。この名付け方のおりの体系として理解するならば、「硬変化」と「軟変化」を覚えた後で「混合変化」を覚えるという順番になる。ところが、この文法が導入されるような初等学習者の語彙では「軟変化」の形容詞より「混合変化」の形容詞の方が多く、「硬変化」を基本として導入した次は「混合変化」を導入すべきである（堤 2002）⁶。

このようなことも文法教育で考慮すべきであろう。

3.3 ロシア語コミュニケーションのための四技能それぞれの文法・目的達成のための文法について

(3) は「聞く・話す・読む・書く」のいわゆる四技能ごとに教育文法は異なりうることを述べている（そう考えないものは「無目的な文法」と呼ばれている）。(4) は正確に使用できるようになることがその文法項目を習得したことになるとの考えを改め、(コミュニケーション上の) 目的を達成できることを重視すべきと述べている⁷。

にならないと思ったことは確かである。また、別の受講生は、私がある語形変化を唱えてみせると、「やはり、そういうのは覚えられないといけないのですね」と言っていた。語形変化を覚えるのが大変だったようだ。私自身、大学に入って本格的にロシア語を勉強するまでは、ラジオ講座やテレビ講座を利用してはいたが、ほぼ独学状態で、そのころは個々の語の変化はあまり覚えることができなかつたように思う。

ロシア語を使う必要がないと（ロシア語でコミュニケーションをとる必要がないと）語形変化も覚えられないとも考えられる。カルチャーセンターの受講者も昔の私も、実際のロシア語でのコミュニケーションからは事実上離れたところにいたと言える。

⁶ 1回の授業ですべてを導入するにしても、語彙数では「混合変化」が「硬変化」を上回ることにふれるのがよいと考える。

⁷ その際に何を重視するかは、以下の基本方針によるとしている（野田, 2005a: 9）。

- (i) 誤解を与える誤用は重視し、誤解を与えない誤用は重視しない。
- (ii) 一生懸命教えても習得されない文法項目は重視しない。

ロシア語の主語と動詞語尾の一致についてみることにする。ロシア語の場合、主語の数および人称あるいは性と動詞語尾は一致する。したがって、逆にいうと、動詞語尾に主語のそれらの特徴は示され、主語が明示的に現れなくとも動詞語尾だけでこれらの特徴は示されていることになる。しかし、ロシア語ではそれにもかかわらず、(特に書き言葉では)主語を省略しない。したがって、書かれた文を理解する場合(すなわち「読む」の場合)、主語と動詞の意味が理解できれば、主語と動詞語尾の一致を確認しなくとも、文の意味が理解できることになる(少なくとも主語と動詞について)。それに対して、「書く」の場合は、(大人のロシア語として)正確に語尾を綴る必要があるだろう⁸。このように、語尾の正確さの重要度は「書く」と「読む」では違いがある。

四技能での区別や目的達成の重視は文法教育で考慮に値する。

4. まとめ

ロシア語教育の目的は、学習者がロシア語でコミュニケーションできるようになることである。しかし、それぞれの学習者におけるロシア語コミュニケーションの目的は一様ではない。それに応じた教材や教育法が用意できるのが理想である。このことは文法でも同様である。(それぞれの)学習者のロシア語コミュニケーションでの必要性・重要度を把握して、それに応じた教育文法を策定できるようにする必要がある。

その際に、既存の文法における体系や形式にとらわれず、あくまでもコミュニケーション上の必要性(重要度・目的)を重視する。また、「書く、話す、読む、書く」の四技能も考慮に入れる必要がある。技能により文法項目の重要度が異なることがあるからである。

なお、このような観点を文法教育あるいは教育文法に導入することは、四技能をすべて高度のレベルまで習得しようとし、幅広いコミュニケーション能力を獲得しようとするような学習者(エリートロシア語学習者)の教育にも大いに有益である。個々の項目の学習においても、コミュニケーションを念頭においた指導法・学習法が確立されていれば、それに則して学習していくのが効率的なはずである。

最後に、ロシア語教育文法をコミュニケーション上の必要性という観点から改訂するならば、何が重要であるかを判断しなければならないことも付け加えておく。ロシア語のコミュニケーションの精査が必要である。

(iii) 目的を達成する達成するために必要なストラテジーは体系的でなくても、重視する。
⁸ 語尾を間違えても、外国人として大目に見てもらえることもあるかもしれないし、コミュニケーションは成り立つかもしれない。

なお、話し言葉の場合、「聞く」については「読む」と同様のことが言える。「話す」については語尾が正確であるに越したことはないが、実際には語尾は非アクセント音節の場合が多く、その時ははっきりした発音でなくともよいことがある。

参考文献

- 小林ミナ. 2013. 「日本語教育文法の研究動向」『日本語学』(明治書院) vol.32-2, pp.4-17.
- 堤正典. 2002. 「ロシア語初等学習者のための文法と語彙 ー動詞・形容詞ー」『神奈川大学言語研究』第24巻, pp.149-167.
- 野田尚史(編). 2005. 『コミュニケーションのための日本語教育』くろしお出版.
- 野田尚史. 2005a. 「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」野田(2005)所収, pp.1-20.
- 野田尚史. 2013. 「『オーダーメイド』の文法をめざして」『日本語学』(明治書院) vol.32-2, pp.62-71.
- Величко, А. В. (ред.) 2009. *Книга о грамматке. Русский язык как иностранный*. 3-е изд., испр и доп. М.: Изд-во Московского университета.

コミュニケーションのためのロシア語教育文法についての覚書

堤 正典

ロシア語教育においてもコミュニケーション力が重視されなければならない。その中で、ロシア語教育のための文法もよりコミュニケーション能力重視のためのものに考え直していく必要もあるだろう。

日本語教育文法について、野田（2005a: 1-2）は、コミュニケーションのための教育文法の必要性として以下の2点を挙げている。

- (1) 学習者の多様化に対応する日本語教育文法
- (2) 日本語学に依存しない日本語教育文法

さらに、コミュニケーションのための日本語教育文法の基本的な方針が5項目挙げられている

- (3) 無目的な文法から聞く・話す・読む・書くそれぞれでの文法へ
- (4) 正確さ重視の文法から目的を達成できる文法へ
- (5) 一律の文法から学習者ごとに文法へ
- (6) 骨格部分重視の文法から伝達部分重視の文法へ
- (7) 形式を基盤とする文法から機能を基盤とする文法へ

本論では、上記の(1)(2)(3)(4)を特に取り上げ、ロシア語教育文法に当てはめて若干の考察をした。

それぞれの学習者のロシア語コミュニケーションでの必要性・重要度を把握して、それに応じた教育文法を策定できるようにする必要がある。その際に、既存の文法における体系や形式にとらわれず、あくまでもコミュニケーション上の必要性（重要度・目的）を重視する。また、「書く、話す、読む、書く」の四技能も考慮に入れる必要がある。技能により文法項目の重要度が異なることがあるからである。

このような観点からの教育文法の検討は、四技能を高度なレベルまで学習する「エリート学習者」の文法教育にも有益である。

ロシア語教育文法をコミュニケーション上の必要性という観点から改訂するならば、何が重要であるかを判断しなければならない。ロシア語のコミュニケーションの精査が必要である。